

## 東京ガス田町工場跡地と豊洲工場跡地の土壌汚染調査方法等の比較

	田町工場跡地	豊洲工場跡地
<b>工場概要</b>	都市ガス製造（1911年～1943年） 敷地 約3ha	都市ガス製造（1956年～1988年） 敷地 約40ha
<b>土壌汚染の公表</b>	2002年6月5日	2001年1月25日
<b>調査時期</b>	東京ガスが、2006年6月～2007年1月調査・報告（ほぼ全域）、2007年3月～2007年10月調査・報告（残り一部）	東京ガス・・・2001年3月～2007年3月 専門家会議・・・2007年5月発足／詳細調査実施（2008年2月～）
<b>有楽町層</b>	ひと続きの地層として、田町にも豊洲にも、それぞれ埋土の下に有楽町層が形成されている。	
<b>汚染が広がりうる範囲についての考え方</b>	有楽町層の最下部にある、土丹層というより緻密な粘土層まで汚染が広がる可能性があるとの立場。	有楽町層を「不透水層」と決めつけ、有楽町層の内部まで汚染が広がらないという立場。
<b>有楽町層内部の土壌汚染調査の特徴</b>	有楽町層の内部も調査。深くなるに従って、汚染濃度は低減しているが、有楽町層内部にも最大ベンゼン620倍、シアン1900倍などの汚染が確認された。 汚染があった地点から下に2m調査して汚染がなかったところでも、そのさらに下の地点で環境基準を超える汚染が確認された。	日本環境学会などから有楽町層内部にも汚染が広がっている可能性を指摘されたが、有楽町層上部より深い所は調査していない。 今後の土壌汚染対策工事の時に、汚染が確認された地点から下に2mまで環境基準を超える汚染が確認されなければ、それ以深は調査せず、対策も講じない。
<b>汚染が自然由来かガス工場の操業によるものかの判断のやり方</b>	ベンゼン、シアン、水銀、鉛、ヒ素、フッ素は自然由来か操業由来かどうかを、有害物質取扱施設の配置図、有害物質の検出状況にもとづき、詳細に分析した。	ヒ素、鉛は土壌溶出量が環境基準の10倍以下は自然由来と最初から決めつけて、調査・分析もせず、ボーリング調査する対象地点から除外した。 その結果、ヒ素についてボーリング調査した箇所は、全体の4%にすぎない。
<b>ボーリング採取土壌の保存</b>	3年保存を基本とした。	専門家会議メンバーが目を通した後は不要として廃棄しようとしたが、都民から保存を求める提訴が行われたので、廃棄処分を中断した。

（注）日本共産党都議団が、東京ガスの土壌汚染状況報告書、港区からの聞き取りなどから作成